



プロミスト・ランド
Promised Land (1974) ブライアン・M・スティブルフォード
(長岡潤平訳) サンリオ (文庫) (12/14刊・¥380)

宇宙飛行士グレンジャーの、シリーズ第三作目。今回は、ジェネレーション・シップ（恒星間を、何世代にもわたって飛ぶ宇宙船）の子孫である、狂信者が支配する惑星が舞台。原住民たちは、植民者によって人間化された感性の裏側に、その民族独特の思想を忍ばせている。

だがしかし——いつまでたっても話が始まらない。そのうち、なんとなく終ってしまう。盛り上がりにも全く欠ける。この作者の書く話は、心理描写にしても設定にしても、ソツがなく、その点つけ入るスキは少ない。けれども、あまりにハツタリがなさすぎる。スティブルフォードがファン出身者であるが故の、SFを知り過ぎた悪弊が出ているとしたか思えない。この展開はありきたり、この設定はよくある、ここでアクションを入れると通俗すぎる——と消去していった、何も残らなくなつたスケルトン。確かに、赤面するようなわざとらしさや、カビ臭い倫理観の押し付けはないけれど、考えすぎではないのか。

このシリーズ、そういう意味ではスペースオペラなんかではもちろんあり得ないわけだ、普通SFの萎縮版といった感じだ。(俊)